



(写真提供) 鈴木商店記念館

金子直吉は1866年、現在の高知県仁淀川町に生まれました。今年
は生誕150年に当たります。極貧の幼少期を
過ごし学校にも行けませんでした。丁稚奉
公していた質屋で質草の経済書や中国古典な
どを読みあさり、膨大な知識を身に付けました。
20歳の時、質屋店主の推薦で神戸の貿易商・鈴木
商店に入店し、すぐに頭角を現します。28歳の時、
当主の鈴木岩次郎の急死により、夫人のよねから
番頭として経営を任されます。

当時、台湾ではセルロイドの原料の樟脳が大量
に生産されていました。金子は、台湾の財政的自
立を目指す初代台湾民政長官・後藤新平に協力
し、台湾総督府による樟脳の専売を成立させま
す。その功績から台湾樟脳油の65%の販売権を
獲得した鈴木商店は大躍進を遂げました。この
間、金子は台湾銀行との関係構築にも成功しまし
た。その後、金子は「生産こそ最も尊い経済活動」
との信念から製造業に進出し、「煙突男」と称され
るほど工場建設に邁進していきます。

1914年に第一次大戦が勃発すると、海外駐在
員の情報から戦争の長期化と物価の暴騰を予測、
いち早く必要物資を買い付けて莫大な利益を生
み出しました。17年、鈴木商店は三井物産を凌ぐ
日本一の商社になります。金子は翌年の米騒動に
よる本店焼打ちにも屈せず、次々と関連会社を設
立し、鉄鋼、造船、化学、繊維、食品など約80社に
及ぶ産業コンツェルンを形成していきました。しか
し、第一次大戦後の不況、関東大震災、金融恐慌と
いう相次ぐ荒波により鈴木商店の経営は急速に
悪化していきます。27年、頼みの台湾銀行からの
融資を打ち切られた鈴木商店はついに倒産しま
す。金子は主家への忠誠を貫き鈴木商店の再興に
奮闘しますが、44年に77歳で他界しました。

「無欲恬淡」の金子が育てた多くの人材は、そ
の後、政財界で活躍しました。また、神戸製鋼所、
帝人、双日、サッポロビールなど
鈴木商店を前身
とする企業は、
現在も多様な分
野で日本経済を
支えています。



(樹) 絶頂期の鈴木商店本店。米騒動で焼打ちにあう。